98.11.8

地の塩

薬物依存症という病気がある。その唯一ともいえる回復施設がDARC（ダルク＝薬物依存回復施設）だ。依存症者は同じ依存症の仲間とのミーティングを重ねることによって、回復への道を歩む▼そのミーティングに参加したことがある。"感謝"など、その日のテーマに沿って、ダルクのメンバーが過去を振り返りながら淡々と語っていく。話し始める時、必ず次の言葉を言う。「薬物依存の○○です」。短い自己紹介である。その言葉に仲間たちは「ハイ！○○」と大きな声でエールを贈る。自分は薬物依存症者であること、薬物に対して無力であることを認めることから彼らのリハビリは始まる。この言葉に妙に感動した覚えがある▼教会は「罪人」の集まりである。あまり認めたくないことではある、が事実である。教会のメンバー一人ひとりは「罪人」である。罪に対して私たちは「無力」である。罪に依存して生きてしまう。教会の中でも「わたしは罪人の○○です」と公言はしないでも、その意識は大切なのではないか。罪に対して「無力」であることを認めるべきではないか。そうして初めて神に心から依存することができるのではないか。キリスト者として生きること、それは一種のリハビリである▼「信仰による救いは、自らの力によるのではなく、神のたまものである。行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためである」（エフェソ2章参照）。近々、メンバーの二人が受洗する。「薬物依存による犠牲者のために祈る」は、教皇の今月の祈りの意向。（Y）

98.7.5

地の塩

ある女性が結婚前に強く洗礼を望んでいた。幼少の時に母親が信者になり、日曜日には兄と共に教会学校にも参加していた。兄は二年前に受洗した▼彼女は婚約者にも洗礼を受けることを望んだ。二人は教会で洗礼の準備を始めた。ほとんど休まずに通い続けた。一緒に始めた仲間は、一人また一人と減っていって最後は二人だけになった。一年の準備が終わった▼担当の司祭が転任した。復活祭に受洗できると期待していたが、それは、かなわなかった。気を取り直してまた準備を始めた。仲間にも恵まれた。五年前に受洗した夫婦もいつも同席してくれた。一年目にはよく分からなかった聖書の言葉の意味が少しずつ分かってきた。主日のミサはほとんど欠かさなかった。こうして、約二年の準備の後、主の洗礼の日に他の仲間と共に受洗することができた▼聖霊降臨祭に堅信の秘跡を受けた。その三週間後、結婚した。結婚の秘跡はミサの中で行われた。参列者のほとんどはキリスト者ではなかった。新郎は自分が受洗したことを身内のだれにも言っていなかった。結婚式（ミサ）の反応が気になった▼聖体拝領後に参列者の一人ひとりに按（あん）手の祝福が行われた。一人残らずみんなが祝福を受けた。みんなが喜んだ。とりわけ、父親が喜んだ。結婚したことだけでなく、息子が洗礼を受けていたことも喜んだ▼神のなさることはすべて時宜にかなって素晴らしい。すべてに時がある。二人が受洗したことの披露にもなった結婚式。主が食卓と婚宴の席を準備してくださると、こうなる。（Y）

98.5.24

地の塩

ずーっと考えていることがある。聖霊は信者にだけ働かれるのだろうか。洗礼を受けた人にだけ降（くだ）るのだろうか▼使徒言行録に、異邦人も聖霊を受けた話が記されている。「割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物（たまもの）が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。…ペトロは、『わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか』と言った」（10・44～48参照）。聖霊の働きが先にある。だから、異邦人も異言を話し、神を賛美する。納得▼キリスト信者であることに、変なプライドと、選民意識を見ることがある。自分たちだけが真理をつかんでいるかのように思い込んでいる「きらい」がある。そうではない、と素直に認めることが今、求められているのではないか。聖霊は教会の外でも働いておられる。洗礼を受けていない人々も「同様に」聖霊を受けている。二十一世紀は超教派で神を賛美する時代になるのではないか、という予感がする。マザー・テレサの活動、教会一致運動や超教派の対話の動きなどを見ると、まさに、聖霊の働きを感じざるを得ない。カトリック教会と信者にだけ聖霊が働いておられるのではない。すべてが唯一の神の創造された世界だと信じるなら、聖霊は、当然その世界のすべてに働きかけておられる。すべての人にも▼聖霊の年。聖霊の働きをわれわれが勝手に狭めてはならない。広く、深く働いておられる聖霊に気付く恵みを祈りたい。（Y）

98.4.5

地の塩

福音宣教は教会の第一の使命？　教会の現実を見ると必ずしもそうとは思えない▼友人を喜んで教会に連れて来ようとは思わない。ぜひ、会わせてみたいような司祭、修道者がいない。要理のクラスを紹介しようにも、それがない。あっても、週に一度、決まった時間だけで、勉強を望んでいる人の都合に合わせることを考えてもくれない。聖堂も、信徒館も、司祭館も夕方早くに閉まっていて開いていない。司祭は忙しすぎて肝心な時に相談にのってくれない…。ないない尽くしで泣いている人がたくさんいる。そんなところにはだれも来ない。来ても、みんな"よそ"に行ってしまう▼人々は教会に何が「ある」かに関心がある。教会には人々に提供する何かがある。提供すること、それがサービスであり、奉仕であり、仕えることである。教会は基本的にサービス業である。人々が何を求めているのか、それを与えるのが、教会の使命ではないか。人々に提供できる「何か」とは福音である。それを提供することが「福音宣教」であろう。福音はイエス・キリストそのものである▼イエス・キリストは、その受難と死によって、愛とは「与える」ことであることを示した。その使命を受け継ぐのが教会である。教会は与えなければならない。そうでなければ教会ではない。時間、場所、安らぎ、慰め……、ほかにもまだ与えるものはたくさんある。限りなくある。なぜなら、わたしたちが与えることのできるものは、すべて神から頂いたものだから。（Y）

98.2.22

地の塩

幼稚園児のころから洗礼を望んでいた子が受洗の準備をしている▼プロテスタント系の幼稚園に通っていた彼女はお祈りが好きだった。「神さまのいる学校」に行きたいと強く望み、あるミッションスクールに入る。一年生の最初の宗教の時間に「洗礼を受けたい」と言う。宗教科担当のシスターは、その気持ちを親に伝え、子どもには、「ミサに行ってみたら？」と勧めた。初めてミサに参列した彼女は、そのとき、洗礼を受ける意志を固める。四年生になってからは、毎週、教会学校に行くようになった。日曜日には自分で起きてミサに行く。一年生の妹もついて行く▼「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである…」子どもにかかわる事件が頻発している。さまざまな原因が考えられるだろう。第一の原因は、彼らを神のもとから遠ざけていることにあるのではないか。大人でも同じ。あの「放蕩（とう）息子」の第一の罪は「父親から離れたこと」にあった。人は神から離れるから、罪を犯すのである▼教会の近くの子どもたちが、たまに遊びに来る。「教会に入ってもいい？」と聞く。子どもたちには子どもたちの、神さまとのかかわりがある。それは大人にはよく分からない世界でもある。彼らはそこで神さまと話し、「やすらぎ」を得ている▼長年、心の中で温めていたこと、望んでいたことがもうすぐ実現する。彼女の望みは妹に伝わり、そして親にも伝わった。今、彼女の妹も、両親も、洗礼の準備をしている。（Y）